戦国期の津具金山

三浦茂美

「オーイ、今夜は映画のある日だぞ」夕方になると早飯をすまし、近所界隈の友達をさそって鑑賞に出かけたものだ。

津具金山最盛期の昭和一四～一五年頃であった。当時は、映画などみる機会も少なく心うきうきで、皆揃って二キロメートル弱の金山まで出かけた。

選鉱場の広場に幕を張り、白黒の映像を月光の野外でみた。この印象は今だに強く残っている。従業員慰労のため、月に何度もあって、多くの村人で賑やかだった。

当時は国策に沿った産業であった。探鉱も順調、大きな冨鉱帯にあたり隆盛を極めた。「津具金山株式会社」を設立、昭和一三年には資本金三〇〇万円、職員、工夫が多い時は三〇〇余名になった。村外からも工夫等が流入したので村の人口も増加した。景気も金山で活気がでて村内でも殆どが従業員として働き、小売商も活況を呈していた。

一日の選鉱七〇トン、この時分に自然金一七六グラムが発見されたという。豊橋市内に事務所を構え、東三河でも大きな事業所の一つであった。

沈黙の江戸時代

喜庵（長野県下伊那郡下條村）自筆の記録に。（津具字中家裏村松運平の調書より）「喜庵母方の祖父伊藤伝右エ門と申者、千木の助兵衛の聟にて、三州津具の金山へかかり申候故、喜庵母は、津具生れにて御座候」

佐々木喜庵（一六四〇～一七一四）は、「下条由来物語」の著者であり「下条記」ともいわれ、戦国の豪族、下条家の興亡を中心として、長野県下伊那郡南部各地の史料を蒐集した。元禄の頃に至ってこの書を完成したといわれ、比較的晩年の作という。

伝右エ門は、慶長三年（一五九八）父死後、長野県下伊那郡千木村の助兵衛の聟となり暫く安住したが、故有って三州津具に三年住すとあり、この間に金山採掘に係ったと思われる。

江戸時代に入ると、上津具村は天領、下津具村は挙母藩に属し、為政者の確執などから金山開発はストップ状態になり、大正の頃まで地殻の底に眠った。この間住民の金山に係る古記録が見当らない。

伝右エ門がどう従事したか、慶長年間以降どこまで時の為政者が係っていたか、解明できていない。

信玄・信長・家康が金山に係ったこと

応仁の乱後、天下は乱れ、各地の戦国大名は富国強兵に意をそそぎ産業を起し、実力を養っていた。金山の鉱床発見もこの時代であった。元亀三年（一五七二）かの三方原の戦において武田信玄が家康と信長の連合軍を打破り三河に入った頃である。その信玄も軍資金を得んと狂奔し、ついに津具で金を発見した。ここで得た金が、彼の東奔西進の、合戦の軍資金となり、大きな力となったと伝えられている。

津具金山が戦国武将の勢力入り替わりあっても、金山の開発、温存に何れも特段の扱いをしていた。

古い金山として知られる、佐渡「相川金山」の開抗も、慶長六年（一六〇一）といわれている。津具金山は、この発見に先立つこと三〇年弱の昔で、我が国産金史上最も古い方といわれている。

三方原で勝った信玄は、三河に進出し、信長と雌雄を決する戦を計画していたが、甲斐へもどる途中病死をした。天正元年（一五七三）七月室町幕府は滅亡、自然に信長の勢力圏となり、天正三年五月長篠、設楽原の戦いで信長、家康の連合軍が信玄のあとをついだ勝頼を破った。

信長は、翌年正月から同九年九月まで実に足かけ六年を費やし「安土城」を築城した。たびたび居城を移し新しい支配の中心となる土地へ、自分の城を移していくという考え方であったといわれている。

津具字上町裏の「渡辺家」に信長が津具金山採掘、保全に宛てた書状が家宝として秘蔵されている。

信長か、信忠の天下布武の朱印状で、信州の採鉱夫を還住させ金を採掘させよと言っている。

「朱印状原文」

信州金鑿事　早可被還住、不可有非文課役等　并誰々雖為知行分山河金可鑿之旨金鑿中可令存知者也

天正一〇年三月　日

天下布武の朱印

文意は、津具金山から立ち退いている信州の金堀夫を、早く呼び返して採掘を再開されたい。金鉱夫に対して非道、過分の課税、賦役をしてはならない。いま津具金山が誰の知行所になっても、山金、河金（砂金）の採取を行なうべきであると、信長が命じている。このことを金堀夫に知らせてやるがよい。

この命令書を、津具金山経営者に与えたものである。

金山は、直轄領にしていたといわれる。

信長は、この年の六月二日未明、家臣の明智光秀に本能寺の宿所を襲われ殺された。

また、渡辺家所蔵の、天正一五年六月二五日付で、金堀六〇人衆に宛てた書状がある。

徳川家康は、この当時諸国の金堀りにこれと同じ書状を発している。

文意は、武田時代に使っていた譜代、下人の金堀夫や、技術者たちが何処の誰に奉公していても、これを家康の名において呼び戻し、金山に勤めさせることを命じたものであるといわれる。

戦国期の津具金山は、信玄発見以来、武将たちの支配力により採鉱夫等に動揺があって、信長、家康の書状をみても明らかである。伊藤伝右エ門にしても時代背景から想像できる。

信玄、信長、家康ともに、軍資金確保のため、金採掘について異常な関心と保全につとめたことである。

文化財として

元亀三年頃より、信玄が採鉱を始めたという坑道が、向山、泥沢地内にあって、昭和初期には、まだ一〇ヶ所位痕跡があった。現在一ヶ所を町の文化財史跡として保存している。

今回、町の文化財保護審議会において、協議の結果、県指定文化財の候補物件として調査表を提出する合意を得た。